

「出来ない」を「出来る」に。

六年 H・N

手紙を貰った時の嬉しさはなんとも表現しがたいものだと思います。私は貰った手紙は保管する癖があり、確認してみたところ古いものだと幼稚園の年中の時に担任の先生に貰った手紙にまで遡りました。その中でとても印象深かった手紙があります。小学生のころ、毎年の恒例行事で小学二年生が郵便屋さんになって校内の至る所に手紙を届けるというものがありました。誰が誰に手紙を出してもいいのです。住所の代わりにクラスを書いてダンボールで出来たポストに投函すると、当番の生徒が決まった時間にその人の教室まで届けてくれます。私はその手紙を受け取ったのは小五の時でした。備え付けのハガキがなかったらしく画用紙を規定サイズよりはるかに大きく切り取って代用した、黒い色鉛筆で本文の書かれた手紙です。差出人は当時小学二年生だった、特別学級に在籍していた少女。平仮名だらけな上に文字と文字が重なっていて、加えて本文が途中で終わっているという手紙でした。察するに彼女が伝えようとしたのは、休み時間に一緒に遊べない時でもあやとびを練習してるよ、まだできないけどできるまでがんばるよ、みたいなことだと思うのですが、残念ながら未だに解読できていません。私は彼女が足し算や平仮名の学習についてかなり苦労していることを知っていましたから、その手紙を貰うまで、彼女が誤字は多くても字が書けるようになったことを知りませんでした。それだけにその手紙を貰った時は本当に驚いたのです。彼女から来たその手紙は今でも私の宝物です。

私は小学一年生のときに仲良くしていた女の子が軽度ではあったものの知的障がいを持っていました。その縁があり彼女が特別学級に編入したと同時に私もしょっちゅう特別学級に出入りするようになりました。ほとんどの子が見ず知らずの私をすんなりと受け入れてくれましたが、その中で特に仲良くなったのが手紙をくれた女の子でした。はじめはいつも周りにいる友人たちとはどこかが違う彼女たちに戸惑いました。しかしその明るさと純粋さに戸惑いは消えて毎日休み時間に一緒に遊ぶほど仲良くなり、私自身がいつしか彼女たちとの時間を楽しみにしていました。

私たち人間は、出来ないことはあって当然のことだと思います。私は小さいころから極端に運動が苦手です。逆上がりも跳び箱も未だに出来ません。本当

です。例を挙げれば体育の時間の最後の方で一人ずつ跳び箱を跳ばされる時間などは消えてしまいたいくらい惨めでした。運動だけに限らず出来ないことのたくさんある私はそんな自分が惨めで情けなくてたまらなくなるときがあります。出来ないことがあることは当然だと頭ではわかっているはずなのに、惨めなものは惨めなのです。そんなときはいつも、ふと小学生時代の特別学級の彼女たちとの交流の時間を思い出します。私に手紙をくれた彼女は、出会ったときは平仮名が書けませんでした。足し算が出来ませんでした。前跳びも飛べませんでした。正直なところ、私はちょっと人より勉強がスローペースなこと以外に彼女のどこに障がいと呼べるようなものがあったのかは今でもわかりません。側から見れば彼女は普通学級にいてもなんの違和感もなかったことでしょう。そんな状態でありながら出来ないことがあるということに対して、彼女も惨めな思いをしたのでしょうか。直接本人に聞いたわけではありませんが時々弱音を吐いていたことを考えるとやはり出来ないことは苦しかったのだと思います。しかし彼女が偉かったのは、諦めず努力し続けたところですよ。あの手紙を書くのにも彼女は相当な時間がかかってでしょう。足し算も一桁の繰り上がりなしならば私が卒業するまでに出来ていたようですよし、縄跳びに関しては毎日休み時間にこつこつと練習を重ね、前跳びのみならず後ろ跳び、加えてあやとびも数回出来るまで上達しました。そんな彼女のことを思い出すと、自分の出来ないことに対しても少しだけ前向きになれる。

出来ないことがあるのは恥ずかしいことではない、と口で言うのは簡単ですが、実際のところそれを完全に受け入れることは相当難しいことだと思います。私自身、彼女のことを考えれば少し前向きになれるとは言ったもの、出来ないことがある自分を受け入れられるのかと言われればそんなことはありません。出来ないことは隠したいですし、それが白日の下に晒された日には授業中にも関わらず泣きそうになることも実は多いです。しかし出来ないことがあるのが当然である反面、自分にしか、とはいかなくても出来ることもあるのも事実です。先ほど例に挙げた彼女が出来たことは、諦めないことと、努力することでした。彼女の目の前に立ちはだかった出来ないことは、彼女にとっては挑み続けなければいけない壁でした。その壁を、彼女は一つ一つ地道な努力によって乗り越えていったのです。諦めないこと、そして努力することは彼女が持つ立派な才能だったと私は思っています。その努力で、彼女は少しずつではありますが、自分の「出来ない」を「出来る」に変えていったのです。私がおその場面

に直接立ち会えたのは縄跳びくらいのものでしたが、全然出来なかった前跳びを十回飛べたときの彼女の笑顔を忘れることができません。

その人の持っている出来ないことは、なにかのきっかけで出来る、に変わることがあります。私に手紙を書いたことは彼女が少しは平仮名を書けるようになったと思えるきっかけになったのではないのでしょうか。私は小学生の頃の特別学級の友人たちとの交流から漠然と思い描いていた障がいを持つ子供達と関わる仕事がしたいということと、誰かの出来ないを出来るに変える為の手伝いがしたいということ、この二つの思いが重なって特別学級の教員になりたいと思うようになりました。その思いには、あのとき特別学級の生徒と私の間に立って様々な助言をくれた学級の先生方の影響も大きいように思います。私は小学校卒業までの二年間で彼女以外にも何人もの特別学級の生徒たちと関わりました。その中で先生に言われた「それが彼女の特徴だから」という言葉は私が今でもずっと念頭に置いているものです。障がいは人によって持つものが違います。一口に知的障がいと言っても同じ接し方では通用しない場合が多いというのも私が特別学級との交流を通して学んだことの一つでした。私は一人一人の障がいや性格を把握して、柔軟に生徒と付き合っていける先生になりたいと思っています。その子の障がいに対する理解と対応はもちろんですが、その子が出来ることを見つけていけるような仕事がしたいです。